慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第二十五～三十章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XXV–XXX) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.62 (2016. 3) ,p.189(22)- 210(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20160331-0210

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』

（第二十五～三十章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

十九世紀半ば、パリ近郊に住む中産階級の家族の物語。父親を理想の男性像と看做して慕い、縁談ではどんな条件の男も評価せず相手を拒絶し続ける次女ルネ。水彩画を嗜みピアノを奏で、サロンでは演劇を披露するなど当時のブルジョワの令嬢が受けた芸術教育を体現する存在であるが、「結婚適齢期」は自ら進んでやり過ごそうとしている。人生の新しい一歩を踏み出すことを躊躇っているのではなく、拒んでいるのだ。他方、長男アンリは経済評論家としてパリで活動し人脈を広げ、富豪の知人ブルジョ夫人のサロンに出入りするや秘かにその愛人となり、更に並行してその娘ノエミとも関係する。計算高く冷静な、そして冷徹ですらある野心家のアンリ。世間知らずで純情なルネは、その兄の計略を見抜き愕然とする。この兄を愛しているのは、騙されたと気付きながらも若いアンリへの思慕なしには生きられなくなってしまった

ブルジョ夫人と、ノエミ、後者はルネの幼馴染みでもある。不品行をなじる妹と聞く耳を持たない兄。これまでの裕福で安定したモープラン家の幸福の図が、微妙に歪み始めた。

〔翻訳〕

二十五

「お上がり、アンリ」階段を前にしてモープラン氏が息子に言った。するとアンリが父親を先に通そうとしたので「お上がりなさい」とモープラン氏は繰り返した。

三十分の後、父子は法務大臣邸からもといた地点へ降りてきた。

「どうだい！　わたしのした事に満足だろう、アンリ」そう言ってモープラン氏は顔を上気させた。「わたしは、お前の母さんやお前が望むことをしたのだよ……この名前だ……お前が名乗ることになるのは……」

「お父さま……」

「よいよい、それ以上なにも言うな……わたしと一緒に帰るか?」父は息子に訊ね、フロック・コートの釦を閉めたが、その際の軍隊式の挙動が、老兵の感動をきりりと引き締めた。

「いいえ、お父さま、失礼させて頂きたく存じます……今日はたくさんすることがございますから……明日、夕飯の時分に参ります……」

「それじゃ、また明日……大歓迎だよ……お前の妹は相変わらず少し病気ぎみだが」

父の乗った馬車が遠ざかって行くのを見送ると、アンリは顔を宙に向けてから、懐中時計を見下ろし、運が向いてきたのを背中に感じている男の軽快かつ無遠慮な足取りで、ラ・ペ街に突き進んでいった。

ショセ＝ダンタン通りの角で、彼はカフェ・ビニョンに入ったが、そこには、金銭至上主義と田舎臭さを発散する肥えた若者たちが彼を待っていた。

昼食の間は地域援助の話で持ちきりで、そのあと葉巻を吸いに出たブールヴァールで会話は、輪作、排水法、石灰を散布しての土地改良といった問題にはじまり、選挙や県の精神、農事共進会内で構想され、計画案の大綱を作り、テスト段階に入っている立候補の機会にまで及んだ。二時になると、アンリは自身の理想の農地について論じる記事の執筆を仲間の一人に約束しつつ、これらの男たちに別れを告げ、ある建物の前に着くと、彼のサークルがある階まで上がり、さまざまな新聞に目を通し、さらに手間隙かけて執筆しなければならないと思われる主題をゆっくりと手帳に記した。

そこを出て今度は、ある保険会社へ報告書を読むために駆けつけたが、この会社の検査委員会に於いて、彼は父親の産業界での名声と名誉のおかげで良い地位を獲得していた。四時になると、四輪箱馬車に飛び乗り、サロンを主催したり、影響力を有していたり、男の経歴に役に立つ人間関係を持っていたりする女性たちを訪ねて回った。「労働者日曜善行協会」への分担金を渡し忘れていたことを思い出し、それを届けにも行った。

七時になると、口元には親愛の情を漂わせ握手する心構えもしっかりできた状態で、彼はレストラン「ルマルドレ」の階段を昇っていったが、その先では、彼の中学の同窓会の年に一度の宴会が催されていたのであった。デザートのとき彼は発言し、昼にサークルにおいて即興で行った演説を繰り返し、同胞愛や家族の価値の再認識や、過去と未来との繋がりや、不当な形で不幸に見舞われた旧友たちへの援助等々について語った。拍手喝采が

巻き起こり、雄弁家はその場を後にした。ダゲッソー記念講演会に出席し、そこを出るとポケットから白いネクタイを取り出し馬車の中でそれを締め、さらに三つか四つの夜会に顔を出した。

二十六

兄の部屋から出るとき、ルネは心臓に強い衝撃を覚え一瞬足がもつれたが、それからも動悸は続いた。一週間ほどのあいだ、彼女は体調を崩していた。病魔は、安静に過ごし二三個、ジギタリスの錠剤を投与することで退散した。が、彼女は悄然としたままであり、その悲しみは時が経っても癒えることはなかった。ルネが病むのを見ながら、その病の出どころを知っていたアンリは、彼女と和解するために手を尽した。気を遣い、親切にし、彼女をねんごろに注意深く扱ったが、そこに彼は自身の後悔の念らしきものを込めた積りだった。こんなとき誰もがするように、心の赦しを得、意識をかたくなさから解き放ち、怒ってしまった魂を鎮めようと試みた。しかし彼はいつも彼女のなかに、冷淡さや嫌悪感、またうそ寒い内に秘めたある種の決意のようなもの感じていた。自身の粗野な態度による侮辱だけは、ルネの念頭から去ってしまっているのをアンリは理解したが、それは、彼女が兄は許せても、その人間としての信条は赦すことができないことを意味していたのであった。

母親は、ある日、気晴らしをさせるため、ルネをパリに連れて行くはずだったが、出発の時刻になって都合が悪くなった。買い物をする予定があったアンリは、自分が彼女を引率していこうと提案した。そこで二人は出発した。パリに到着し、リシュリュー街を通過するとき図書館の前で、アンリは鉄道の停車場から乗ってきた四輪馬車を止めさせた。「ちょっと待っていてくれないか?」と妹に言った。「ぼくは称号が専門の学芸員に訊ねることがあるから。そうだ、おまえもぼくと一緒に来たらどうだい？　いつだっておまえは写本の挿絵を見たがって

いたじゃないか……あれも同じ部屋にあるよ……眺めていれば面白いと思う……その間にこっちは聞きたいことを聞いてくるから……」

ルネは兄の腕を取り、ふたりして写本の収められた部屋へと上っていった。アンリはある細長い机の奥に彼女を坐らせ、時禱書を一冊持ってこさせて、自分は窓際の引っ込みのところにいる学芸員と話しに行った。

ルネはゆっくりと本のページをめくっていた。彼女の後ろには、図書館員の若い男が暖房の温気孔のまえで暖をとっていた。やがて彼のもとに、学芸員と話しているアンリのそばの机の上に書物と称号を運んでいったばかりのもうひとりの図書館員がやってきた。そうしてルネは背中からすぐのところでこう話すのを聞いた。

「おい、シャムロ、あの背の低い男、見えるかい？」

「ああ、レザールさんの机にいる男だろ」

「そうだ、彼は、自分は事情に通じていないと威張った調子で言っている！……ヴィラクールと云う名の家系が嘗てあったかどうか、あったとすればそれが途絶えているかどうかを確かめに来ているんだが……答えは、存在した、が正解さ……おれだったら、もし彼に訊ねられたら、今もあるに違いない、と答えるだろうよ……かつてのものと現在のものがおんなじかどうかは知らないけれども……だが確かなことは、自分が故郷を出たときにはあったということさ、そう、がっちりした長男がいたな、ボワジョランさんという人だったな、おれたちは一度殴り合いの喧嘩をしたが、一発が非常に重かったのが、奴が強い男だった証拠さ……おれんちからすぐのところさ、彼らの城館は……サン＝ミシェルの向うに塔が見えていたな、それからもっと遠くには……ああいったものは、俺の時代、すでに彼らのものではなかったなあ……浪費家がいたのさ、あの家族には……ああ！　変な貴族だったなあ！　あの人たちは、クロワ＝デュ＝ソルダの森やモット＝ノワールなんかで炭鉱労働者なんかと生活していたのさ……森の神サテュロスのように……」

サン＝ミシェル、クロワ＝デュ＝ソルダの森、モット＝ノワール、これらの名詞がルネの頭に入った。

「さあ、欲しかったものは手に入った」彼女のところに戻ってきて、アンリは快活に言った。そうして彼は彼女を連れ去った。

二十七

ドノワゼルは、ピアノを弾いているルネのもとから去り、庭を散歩していた。家の方に引き返しながら、彼女が譜面を見つつ奏でていた曲とは別のものを弾いているのでびっくりしたが、やがて突然音楽が止んで、何も聞こえなくなった。彼は客室のほうに向かい、ドアを開けてみるとピアノの椅子に掛けたままのルネは、頭を両手の中に抱えてさめざめと泣いていた。

「ルネ、おやおや！　どうしたんだ？」

二三回すすり泣いたので、はじめはルネの返事は聞こえなかった。が、やがて子供がするように両手の甲で両目を拭った彼女は、とぎれとぎれの涙声で返事をした。

「これって……これって……たまらなくやりきれないわ……ショパンのこの曲……彼が自身の埋葬のために作った曲よ、知ってるでしょ……自分のミサのために作った……パパはいつもあたしにこの曲を弾いてはいけないって禁じてた……今日は誰も家にいなかったから……それに、あなたは庭の奥にいるのだと思ってたから……ああ！　この曲が心にどんな影響を与えるか良く知っていたのだけれど……でもこの曲を聴いて、どうしてもあたし、泣いてみたかったの……で、ご覧の通り十分泣いたわ……なんか馬鹿みたいでしょ、ね？　あたしって生まれつきひょうきんな質なのにね……」

「おいおい、病気なのか？　ルネ。何かあったんだな……普通は、こんなふうに泣かないだろう……」

「そんなことない……何でもないわ、安心して……とても丈夫よ、まったく何事もないわ……本当にほんと……もしあたしに何かあったら、あなたに言うはずでしょ、違って？……こんな風になったのは、このひどく憂鬱な音楽のせいなのよ……ね、今日はちょっとあなたにお願いしたいことがあるの！　今日はパパが『イタリアの麦わら帽子』を見に連れて行く約束をしてくれているんだけど……」微笑が彼女の濡れた目に漂った。「『イタリアの麦わら帽子』、パレ・ロワイヤルっていえば、あれに尽きるわ！　面白いと思う、ぜったい！　第一、あたし、ああいうのしか好きじゃないから……ほかの演劇、悲劇だとか、恋愛物だとか……そもそも人って、生きていればいろいろ感じることがあるから、わざわざそれを探しに出掛けることなんてないと思う……それに、みんなで感動を共有するっていうのも、なんだか自分のものでないハンカチに顔を付けて泣くみたいで……あなたも一緒に行くのよ、分かってるでしょ……あたしの相方としてよ！　あたしたち、レストランで夕食を取るってパパが言ってたわ……ね、場合によっては、あなた、あたしまた、少女時代みたいに吹き出して笑ってしまうかもしれないわ、英国人の女中と一緒にいるときあたしがしていたみたいに、あなた覚えているわよね、ミス……あなたよく知ってるでしょ？　オレンジのリボンを付けていて、洋服ダンスのなかで、オー・デ・コロンにほろ酔いになってしまった人よ！　素敵な英国女性だったわ！」

そう言うとルネの指は鍵盤の上に置かれ、生き生きと『ヴェネチアのカーニヴァル』を主題にした幻想曲を弾きだした。そして今度は突然弾くのをやめて言った。

「ヴェネチアに行ったことある？」

「あるけど」

「この地上にあんな土地があるって不思議じゃない？　行ったこともないのに惹き付けられ、夢見てしまう。

人によって、ぜんぜん違った国に見えてしまう……あたし、見てみたいのはヴェネチアだけよ……ヴェネチアって、あたしにとっては、ほら、特別な響きがあるのよ……つまらないこと言うわね……あそこは、あたしにとってはすべての音楽家が死後、眠っている街なの……」

彼女は再び鍵盤に両の手を置いたが、音もなくちょっと触れたばかりで、それは恰も指先でピアノの沈黙を撫でているかのようであった。それから、両の手を膝の上にそっと戻すと、すっかり自分の思いに耽るかのような姿勢になり、半分くらいドノワゼルのほうを向いて再び口を開いた。

「ほら、悲しみって……来る前に気配があるのよ……分らないけれど……太陽が照っていて、なんの苦しみもなく、退屈など感じることもなく、目の前に悲しみはない……そんな日常があって……それだから、人は悲しい思いをしたがるし、自ら陰鬱な考えを抱きたがるのよ……泣くことがなくてはならないって……あたしだって時々そうだもの、頭痛がするって言って、枕に頭を押し付けながらただただ涙を流すために寝台に向かうもの……そうしていると、とてもいい気持ちになったものだわ！……だって、そんなときには奮起して、そういう状態から抜け出そうとする気力が萎えているでしょ……それは、気を失いかけているときの状態に似ているの、心臓が打ち止んでしまうのを感じているような心地よさよ……」

「さあさあ！　君の馬に鞍を付けてあげるから、ルネちゃん、一巡りしてこようよ、ね」

「あら！　いい考えじゃない……ならあらかじめ言っておくわね、あたし、今日は、風みたいに突っ走るわよ」

二十八

「おまえはどうなったらいいって言うんだ！　あの可哀想なモンブルトンには四人も子供がいる……しかもそ

れほどの財産もない」モープラン氏は溜め息まじりに官邸筋の辞令を読んだばかりの新聞を折りたたみ、それをテーブルの上の自分から離れたところに置いた。

「そう、人は何時だってそう言うんだわ……誰かが何か卑劣な行為をするや否や、でも彼は何人も子供を抱えているんだぞ！　なんて言うでしょ……本当にこの世の中じゃ、何人も子供を持つのは、そういう事のため、物乞いをするため……そしてたくさんの卑屈な行いをする為でもあるかの様に感じられて来る。恰も一家の父親であれば、ならず者になる権利を与えられてでもいるかのよう……」

「これこれ、ルネ」モープラン氏が窘めようとした。

「だって、その通りじゃない……あたし、人間には二種類しかないと思うの、まず、正直者と……そしてその他の者……四人の子供ですって！　でもそんなことは、父親が一斤のパンを盗むときの言い訳くらいにしかならない筈よ！　そうでないなら、民話に出て来る子沢山のジゴーニュ母さんは人に毒を盛る権利があるって事になっていたでしょうから！……ドノワゼルも、あたしと同じ意見よね……」

「ぼくが？　ああ！　まったく反対だ、冗談じゃない！　ぼくは、結婚している人々や一家の主としての父親たちを考慮した寛容に一票投じるね。ぼくは、ある種の悪徳を、いわば破滅を招きかねないが逃れがたい、そんな悪徳を抱えている者に対しても同様の慈悲を以て接するべきであるとすら思っているのだ……その他の者たち、悪徳もなければ、妻も、子も、扶養すべき何ものもなく、節操を売り、大金を使い、腰を折り、這いつくばり、金持ちになって、なお品位を下げていく者どもに就いては……ああ！　こいつらは、君に任せておこう……」

「あなたには、もうお話ししないから」とルネが感情を害した調子で言った。「放っておけばいいじゃない、パパ、何故なのかしら、パパがこういう話に見切りを付けられないのは、いつも全てを擲ってでも自分の意見を通してきたパパが……だって、不愉快極まりないじゃない、この人のしたことって」

「いや、パパはおまえに反対しているんじゃない……ただ、おまえが腹を立てて、かっかしているだけさ……」

「それが何！　そうよ、あたしは腹を立てている……無理もないことじゃない！　何なのよ、だって、別の政体に全てお世話になっていて……今の政体の悪口を言っていた男でしょ！　そのくせ寝返って現政権に賛同する！　ほんと、パパの友達のモンブルトンはろくでなしよ！　人間の屑だわ！」

「ああ！　おまえ、まさしく言うは易しだよ、そういう言葉は……おまえがもう少し人生を知れば、その生きた分、おまえはあと僅かでも寛容になれるよ……もっと優しくならなければいけない、わが子よ……おまえはまだ若い……」

「そうじゃないわ。血統の問題よ、これは……あたしって、骨の髄までパパの娘なのよ、ほら！……これからもあたし、不快な事はぜったい我慢できないはずよ……こんなのは馬鹿げた体質だわ、でも何うしろって言うの！　だって、あたしが知っている人、いや知らない人であっても、その人が、パパたち男が名誉と呼んでいる事柄を疎かにしているのを見ると何時でも……そうなると、自分を抑えられなくなってきて……恰もヒキガエルを見ているような気分になってしまうのよ！……　不快感、嫌悪感を覚えて……で、上から踏みつけてしまうの！……だって下劣な行為をしていても、法廷の前に引きずり出されることがなければ、名誉ある人として通るわけでしょ？　名誉ある人でも、一人のときには思い出して顔を赧らめる様な類の行いの一つもしているんでしょ？　名誉ある人と言っても、誰も咎めず、何ものも罰さない、けれども自分の良心が痛むようなことはやりかねないんじゃない？……ああ！　ゲームでいかさまをするのより、もっと悪い卑劣な行いは幾らでもあると思うわ！……だから社交界の寛容さは共犯のように見えて、あたしに強い反感を抱かせるの……たしかに裏切りや不誠実がはびこっているでしょ……考えてみると、翻って大悪党に対しては、あたし、寛容よ！　少なくとも、なにがしかの危険を冒しているのだもの、あの人たちは。自分の身を、そして自由を危険にさらしているのだも

の！　健全な賭けに健全なお金が舞い込むわけで、彼らは手を汚さずに陋劣なことをしてなんかいない！　あたし、そっちの方が好きよ、少なくとも卑怯さでは劣るのだから！」

客間の奥のソファーに座り、腕組みをした両手は熱を帯び、全身を小刻みに震わせつつ、ルネはこれらのことを、内心の怒りを顕わにした途切れ途切れの震える声で言った。暗い表情の顔の中で、目だけが輝いていた。

「そういうことを考え合わせると、彼はとても興味深い人物よ、パパのモンブルトン氏は！」ルネはまた話し出した。「彼の年金は一万五六千リーヴルよ！　家賃があともう少し安いところに住んでいて、カルパンティエ夫人の服を娘に着せていなければ……」

「ああ！　それは考慮に値する言葉だね」とドノワゼルが言った。「独身なら年金が五千リーヴル以上、既婚なら年金が一万リーヴル以上の男なら完璧に、自身の失われた政体の側を離れないでい続けることは可能だ……名残を惜しむだけのてだてがある……」

「さらに彼はパパに、敬意と握手と帽子を脱いでの挨拶を要求し続けていくんだわ！　ああ！　何てしたたかなんでしょう！　今度彼が来るときには、パパ……あたし、まっさきに退席する、是非ともそうしたいわ」

「砂糖水を入れてあげようか？　ルネ」モープラン氏は微笑みながら言った。「知ってるだろ？　雄弁家ってやつを……一瞬、おまえは本当に綺麗だったよ……雄弁さ……泉のように流れ出て……」

「ええ、ええ、どうぞ、馬鹿にしてください……よく知っているでしょ、あたしは情熱的になってしまう質なのよ、あたしは、パパの言う通りだわ……で、そのモンブルトンだけど……でもあたし間違ってはいないわ、本当に！　こんな人、あたしたちと同類ではないわ、そうでしょう？　ああ！　もしあたしたちの身内がこんなことをしたら、名誉に関わることだわ、名誉に……」

そこで彼女は突然、言い淀んだ。「あたし」目に涙が溢れてきたので、努めつつ彼女は語を継いだ。「あたし、

彼のこと、もう好きになれないと思うの……そう、あたしの心は、彼に対して渇いてしまったみたい……」

「さあ！　今度は、同情心を持とう！……さっきはちょっとした演説会があったのだから……今は少女に戻って！……ダヴァランド夫人がお母さんに送ってくれたカリカチュアの画集を、こっちに来てパパと一緒に見るほうが良さそうだね」

「ああ！　そうね」そう言って、ルネが駆け寄ってきた。そして画集を繰る父親の肩にもたれ掛かって、彼女は二三葉ながめ、それから顔をそむけてしまった。「もういい！　もう十分……驚きね！　醜いものを描いて面白がることが出来るなんて……自然じゃない醜さね！　なんて妙な考えなのかしら！　芸術でも、本でも、何ごとにおいても、まずあたしは、美しいものの味方よ……だから醜いものには反対……それにあたし、カリカチュアなんて、そんなものぜんぜん面白いと思わない……あたしには、可笑しくないわ、こんなせむし男みたいなもの……ドノワゼル、あなたは、カリカチュア、お好き？」

「ぼくには！　泣けてくるよ……うん、滑稽なものを見ると、悲しくなってくるんだ」ドノワゼルは、画集の隣にあった雑誌を手に取りつつ言った。「そういうのは時代遅れの家族の楽しみだと思う……テーブルの上でそういうのを一枚でも見ると、たくさんの陰鬱なことを考えずにはいられなくなるのだが、例えば、総裁政府時代の精神、カルル・ヴェルネのデッサン、またはブルジョワジーのばからしさ！」

「結構」笑いながらモープラン氏が言った。「今度はぼくの『両世界評論』のページをマッチ棒で切っているぞ！　こんなドノワゼルは初めてだ！」

「ナイフ要る？　ドノワゼル」そう言ってルネは、両の手をポケットに突っ込んでから、小物の集まりをざっと引き出し、それらをテーブルの上にぶちまけた。

「ああ！　やれやれ！」とドノワゼル。「それにしても、君のポケットのなかに美術館があるなんて……それを

持っていけば、競売場でせりが出来るぞ……それらは一体なんだい？」

「贈り物よ……ある人の。何処へ行くにも、あたし、これらと一緒なの。ほら、ご注文のナイフ」そう言って、ドノワゼルに渡すついでに父親にもそれを見せた。「これ、覚えてる？　何処であたしに買ってくれたか？　ラングルでよ、むかし、駅馬を継ぎ替えながら……ああ！　古くなってるわ……こちらは……」そう言うと、彼女はもうひとつ別のナイフを手に取った。「これは、ノジャンからパパがあたしの為に持ち帰ったもの……銀の刃は如何ですか……そう言われて、あたし、少しのお金をパパに払った、覚えてる？」

「おやまあ！　こりゃまったく、棚卸しだなあ！」愉快そうにモープラン氏が言った。

「で、その中身は？」ドノワゼルはとても小さな財布を指さして言ったが、それは膨れて擦り切れており、その口からは皺くちゃになって酷く汚れた紙の切れ端が幾つか飛び出していた。

「ああ！　これね、これはあたしの秘密……」

テーブルの上にぶちまけたすべてのものを回収し、彼女はガマ口と一緒にそれらのものを勢いよくポケットのなかにまた仕舞い込んだ。それから、大きな声を立てて笑い出し、彼女はまたポケットを探ってガマ口を引き出すと、ドノワゼルの前の卓上に、中にあった全ての小さな紙片を、手を大きく振りつつばら撒いて、それらを開かずに、一つ一つ何であるかを説明した。「ほら！　これ、これはパパが病気のとき書いてもらった処方箋……これはね、パパがあたしのために作ってくれた歌よ、二年前のあたしの誕生日にね……」

「さあさあ！　その聖遺物をしまって……ぜんぶ隠さなきゃ」モープラン氏はドアが開いてダルドゥイユ氏が入ってきたときに言った。そして、彼は手でそれらの紙片をすべて押しのけてしまった。

「ああ！　ぜんぶ台無しにしちゃった……」と怒った風に言ってルネはそれらをまた、ガマ口の中に仕舞った。

二十九

それから一月が過ぎ、例の小さなアトリエの中で、ルネがドノワゼルに言った。「あたしって、本当に小説的かしら、あなた、そう思って?」

「小説的、小説的……まず訊くけれど、小説的という言葉を通して、きみは何が言いたいのかな?」

「ああ！　あなた、あたしの言いたいことはよく分っているでしょ……いろいろ思い付くってこと……みんなとは違った方法で……起こりそうもない事を、たくさんたくさん考えるってことよ。ほら！　こんな娘さんは小説的よ、つまり、ありきたりの男、何の変哲もなく、単純にドアから入ってきて、パパやママンから紹介された相手、いきり立った馬を宥めたり、溺れているのを水の底から引き上げたりして自分を救った命の恩人などではさらさらない相手と人並みの結婚をするのは、その人にとっては辛いことなの……あたしがこの手の女の子だって、あなたは思ってないわよね、そうだといいけれど」

「思ってない……と言うか、ぜんぜんそういうことに関しては、ぼくは分らないよ……君自身だって、自分がどんな人物なのか、分ってないんじゃないかな、その事に関しては、ぼくは賭けてもいいが……」

「なら、言わせて！　まず、たぶん、あたしに想像力がないからだと思うけど、でも、理想を追い求めたり、ある男性を夢見たりするのは、あたしにはとても滑稽に思えたわ！　そう言う相手は小説の主人公みたいなもので、あたしを虜にすることなど決してなかった。その手の人たちは、育ちが良すぎ、美しすぎ、芸事の才能をいやというほど持っている……結局、そういうタイプには嫌悪を感じてしまうの……でもそんな話、してるんじゃないわ。ねえ、あなた、もし女の人が誰か男の人……誰かさんと一緒に肩を並べて生きていって欲しいって催促

されたら、どうかしら」

「誰かさん……と言うと？」

「説明するわね……女の性質に基づく細かで繊細な要求にまったく対応せず、詩的でなく、それこそ、まったく詩的なところがなく……けれども、善良さが、稀に見る善良さが、彼に欠けているすべてのものを補って余すところがない男の人……」

「それほどの善良さの持ち主かい？　うーん！　ぼくだったら、ためらう事などないだろうなあ、目を閉じたまま、善良さを選び取るだろうね……素晴らしいじゃないか！　そういう人は、本当に稀だよ」

「と言うことは、あなたは善良さを高く評価しているってことかしら？」

「評価しているよ、ルネ、人々が失ってしまったものとして……」

「あなたはどうなの？　だけどあなたは、とても良い人よね……」

「ぼくは、意地悪ではない、と云うだけのことさ。もしぼくがもう少し謙虚に振る舞い、今より驕りが控えめであったなら、おそらく嫉妬深い人格になっていただろう。が、良い人であるということに関しては……ぼくは良い人なんかじゃない。人生にはそんな内面も癒してくれるときがある、童心に戻ることがある……だが、人は心を捨て去るんだ、分るかい、ルネ、大人になっていくときには」

「じゃあ、あなたにとって、善良さとは……」

「うん、人間に揉まれ、人生経験のなかで耐えて残った善良さ、ぼくの人生のなかで、二三のブルジョワ階級の人の中に無傷の状態で出会うことができた善良さ、それはなおぼくにとっては、人間の性質のなかで最高にしてもっとも神聖なものと言えるよ」

「そう……だけどもしある人がとても善良で、あなたが今話したくらい善良だとして、その人が……仮に……

その履いている長靴の中の脚が切断されていて、ガレットの切れ端の様だったとしたら？　然ももし彼が大食いだったら、この良い人は、とても良い人と言えるかしら？」

「それなら！　その人については、脚もお腹も見ないことだ、それで万事足りる……が、すまん、ほんとに、ぼくは完全に忘れてた……」

「何を？」

「いや別に……きみは女なんだよなあ」

「でもそれってあたしの性をひどく軽蔑してることになるわよ、いまのあなたの言い方」

ドノワゼルは返事をしなかった。会話が一頓挫した。

ルネは再び喋りだした。

「ときどきは財産が欲しいと思うことはある？　あなたは」

「うん、何度かは、でも財産を、完全にそれに相応しい形で扱うために、つまり財産に敬意を示さないために……」

「どういうこと？　それ」

「ああ、それを説明しなきゃね、ぼくは、自分が金銭に対して持っている軽蔑を余すところなく示すために金持ちになりたいと思ったことがある……それで思い出すんだが、イタリアへ行って結婚するんだと思いながら眠りについたことが二三度あったな」

「イタリアで？」

「そうさ、だってあそこには今なおロシアの王家の娘がいちばん多く存在しているんだ。それにこの地上にはもはや、文無しの男と結婚してくれるほど十分裕福なその類の者はロシアの王家の娘たち以外にはいないからな

のさ……おまけにぼくは、ちょっと金に困っているような王族の娘であっても喜んで受け入れる準備ができていたものだから……ぼくは難しい要求をする気などなかった……年金は下限が八万リーヴルまでならまったく苦言を呈することはなかっただろう……とはいえこの辺りが、最低額だったわけだが……」

「ごくろうさま」と笑いながらルネは返した。「それで、そんなたいそうなお金を使って何をするつもりだったの？」

「ぼくの手の指の間から、少しずつ少しずつ零れてゆく、ただそれだけ……呆然と見ているより他ないなにか、金持ちの金銭においては、ぼくが決して見たことのない浪費の仕方……ぼくは、有名な億万長者は皆、恥ずべき存在だと思う……考えてもみなよ！　年金が十万リーヴルの男の人生と、年金が一万リーヴルの男の人生は、幸運が舞い込んだ場合、違いがあると思うかい？　君は、ぼくが願いを叶えていたら、ぼくのこんな姿を見たことだろう！　一年で自分の大金を気紛れに、気の向くまま、取りとめもなく使い切ってしまう……パリ中の人々の目を眩ませ、圧倒する……ぼくは紙幣を吐き出す太陽のように回転したことだろう……あらゆる放蕩によって、自分の富を卑しめて見せたはずだ……そして一年後、結婚したのと同じ日に、妻と今度は別れるのだ……」

「まさか！」

「確かにこうするよりないんだ……ぼくが金を好きじゃないことを自分自身に証明する為には。もしここで妻と別れなければ、自分は名誉を失うようにも思われるしね」

「なるほど、妙なことを考えるものね！……あたし、打ち明けて言ってしまえば、あなたの哲学には付いていけていないのだけど……莫大な財産とか、それが与えてくれるあらゆるもの、享楽や、豪華さ、数頭の馬や何台かの馬車……それから好きでない人たちを圧倒し、嫌がらせをする悦び……あたしはお金持ちって、とっても気持ちの良いものだと思うけどな……」

「ぼくがついさっき言ったけど、ルネ、君は女なんだよ、ただの女なんだ……」

三十

ドノワゼルは思っていることを語った。仮に何度か財産を欲したことはあっても、それを羨んだことなどなかった。金銭に対しては心からの根強い侮蔑の情を抱いているが、それは、僅かな富を以て豊かに生きることが出来る男の側からの蔑視の情である、と。

ドノワゼルはパリジャンの中でも、いわゆる典型的なパリジャンであった。パリのあらゆる経験に熟達し、パリ生活の実践を通して、生活の技術に素晴らしく磨きがかかっており、あの都市の生活の申し子として形成されたので、本能、感覚、才能がパリにお誂え向きに発達していた。彼は、野蛮人が処女林のなかで自然を征服してゆくかのように、ボンディの森の木々ように林立する物の値段、パリの物価高に日々勝利しつつ、言うところの近代的と呼ばれる性質を全人格に備えており、完璧に文明人を体現していた。彼は輝きと幅のある富を有している様に見られていた。彼は富める者たちの社交界に出入りし、彼らが集まるレストランやサークルにはしばしば参加し、その習慣を共有し、その娯楽に親しんでいた。伝(つて)を介して莫大な財産をもつ人々に接触する機会もあった。金力万能の世界が彼の眼前に展開した。プロヴァンス人のごく親しい人だけでなされる大舞踏会や、競馬や、興行の初日などに彼の姿は見出された。夏には、川遊びや、海水浴、行楽地などに出掛けた。彼は、馬の一頭くらいは所有しているかのような服装をしていた。

ところが、ドノワゼルは十二万フランを所有しているかいないかといった程度であった。所有地、大地に結び付いている、というより釘付けにされているとする過去の所有の観念にどっぷりと浸かって、絶えず破産に就い

て語り、昔の農民が銀行券を信頼しようとしない如くに年金に対して不信感を抱いていた一族の出身であったにもかかわらず、ドノワゼルは、その身内の先入観を揺るがした。古い遠縁に当る人々の忠告や小言、怒りや脅迫をものともせず、彼は両親が彼に残してくれた小さな農地を売りに出した。彼においては、もはや土地からの収入と生活上の支出との釣り合いが取れなくなっていたのである。彼の目に地所は、ポール・ド・コックの小説のなかで若い男について「ポールは金持ちだった、と言うのも彼には六千リーヴルの年金があったからで……」と書かれていた時代にはなお財産の様式たりえていた。しかしそれ以降、所有地は彼に言わせれば時代錯誤であり、それに対して幻想を抱くことは相当な大金持ちにしか許されない古い財産の形態になってしまったのであった。そこで彼は実行に移り、彼の土地を少々の資本に変えて、それを友人の一人の証券仲買人の忠告に従って、外国国債や株や、収入を二倍ないし三倍に増やす有価証券に、元本を危険に晒すことなく投資した。このようにドノワゼルは自分の資本を公証人の目以外には意味の分からない、現状の財産をもはや目減りさせることのない数字と化し、その財産を調整した如くに人生も調節した。彼は支出を抑えて投資にまわした。彼は見事なまでにパリにおける虚栄やオードヴルに掛かる値段の相場をわきまえており、上手な取引をして、破産を誘発するあらゆる機会を回避する事ができた。彼は支払いの前に勘定書を計算しなおすことを恥としなかった。家の外では、彼は八スーの葉巻しか吸わなかったが、家の中ではパイプをくゆらしていた。彼は割りのいい場所、開店後、始めの三ヶ月はサーヴィスが良い店を嗅ぎ付けるのが上手かった。レストランの酒倉を熟知しており、ブールヴァールのそれに相応しい高級店ではシャンベルタン産赤葡萄酒でも注文するが、それ以外の場所でそれを注文する事はなかった。晩餐を注文すれば、その献立は給仕に尊敬の念をおこさせるほど適切な組み合わせだった。こんなわけで、彼はカフェ・アングレでも百スーで夕食が取れたのである。

彼に於いては、全てにわたって支出は同じような見解で貫かれており、彼はパリで最高の仕立屋の手になる服

を着ていたが、いっぽう外務省に勤める彼の友人の一人に頼んで、大使館の事務局を通してロンドンから彼のすべての合服を届けさせていたのである。また普段の、もしくは年始の贈り物の為であろうか？　彼はインドや中国からの美術品の到着について把握していたし、省みられていない古物やマイセン焼き、セーブル焼きなどの受け取る者は値踏みがし難く、大変な値段を想像してしまうなにがしかの骨董品を、人通りの少ない商店の奥で目にしたことを思い出しがちだった。

これら全てのことは、ドノワゼルにおいては、心のままの自然な、本能的な行為であった。生活の行き過ぎを抑えるこのパリ的な知性の絶えざる勝利は、卑しくちまちまと計算する機会を彼に与えなかった。それは、運よく見つかった生存条件の集まりであり、ブルジョワの継続的な貯金とは別のものであった。また一万五千リーヴルの年金を非常によく秩序立てて活用することで、ゆったりとした気高い感じの生活がなされていて、ある程度の出費があるようなのに、彼は値切るという事をしなかった。

ドノワゼルは、階段に絨毯が敷かれているような、綺麗な館の中二階に住んでいた。彼はそこに三部屋しか持っていなかったが、イタリア人大通りが目と鼻の先だった。喫煙室にしていた小部屋は魅力的であった。それはパリの室内装飾業者だからこそ手掛けられる瀟洒な住居で、壁は目を楽しませるインド更紗でふっくらと覆われ、寝台のようにゆったりとした長椅子が幾つか置かれていた。ドノワゼルは美術品を置かないことで、部屋をひときわ陽気なものにするよう工夫していた。朝は、門番が一杯のショコラを持って上ってきて、ついでに掃除をして行った。夜は街に出て、サークルや居酒屋で夕食を取ったものだった。

この住居の高からぬ家賃、この簡易化された給仕と掃除は、しばしば極めて裕福な人々にさえ欠乏しがちなあの金銭、贅沢するためのあの金銭、パリでは必要の度合いが他の用途の金よりもいっそう高い金、すなわち小遣いに充当する金銭をドノワゼルに多く残した。だが時々、あのより大きな力、つまり不測の事態が突然この生活

に降りかかり、その安定と予算を乱すことがあった。そんなときにはドノワゼルはしばしの間、パリを去って、田舎の川沿いの一日三フランで凌げる旅籠屋に行き当たりばったりに投宿し、煙草代以外には支出を控える。冬に、本当にお金がなくなってしまった年が二三回あったが、彼は国外に脱出し、フィレンツェのような幸福の値段はただで、生活も幸福と同じくらいお金のかからない街に逢着すると、そこに六ヶ月ほど留まり、円天井の部屋に住み込んで、小料理屋でパルメザンチーズとともにトリュフを食し、結社のロッジで宵を過ごし、白椿で飾られ、賑やかな評判の大公爵の舞踏会にも行ったりして、世界で一番幸福な方法で節約をする。

ドノワゼルは愛に関しては、他の事に比べてより多くお金を使ったという訳ではなかったので、愛の中から自尊心を取り除いて考えていた彼は、純粋に相手との関係のための支出だけで抑えることが出来たのだった。人生にのめりこむ勢いを持った唯一の行為であったとは云うものの、彼はそんな場合でも、やはり理性的で冷静であった。彼は貴族然として、パリでもっとも金のかかる娼婦の情熱がどんなものか探ってみたいと思った。当時所有していた十八万フランのうちの六万フランを費やして、彼は六ヶ月に渡って、年金が十二万リーヴルの男ようにラ・ジェニコと生活したが、ラ・マルシュへの旅から帰って来ると、御者に百フランのチップを与えるような女であった。六ヶ月が過ぎ去って、彼は、自分を買った男を初めて好きになったこの女のもとを去った。

この試みで鍛え上げられた彼は、今度は行きずりの関係へと移行した。それから、女を買い続ける単調さのなかで、やがて情事への強い欲求ではなく、女というものに対する大きな関心が湧いた。彼は女の予測できない、意外な、知られざる側面を探求し始めた。女優たちは皆似たような高級娼婦の如く、高級娼婦たちは皆似たような女優の如くに彼の目には映っていたからであった。彼を惹き付けたのは分類に当て嵌まらない女性、パリに慣れ切っている観察者を途方に暮れさせてしまう女であった。彼はしばしば夜になると、徳にも悪徳にも付かず、汚辱のぬかるみを極めて美しく歩く彼女らのうちの誰かに、何気なく、しかし抗し難く惹き付けられながら、舗

道を鳴らして歩いた。ときに、彼は通りすがりに輝きを放つ、あの礼賛に値するパリの娼婦に眩惑させられ、彼女が並木の木陰に入ってしまって見えなくなってもなお、その姿を追ってぼんやりしてしまうのだった。彼の目標は穢れのなかでなお輝く女を発見する事にあったのである。ときおり、彼は郊外の下町で、庶民の中に見掛けることがある、あの天性の不思議な美しさを持った女に声をかけ、話をさせ、眺め、聞き入り、研究する、それから、それらに疲れてくると、人ごみのなかに彼女を帰して、幌つき四輪馬車に乗る彼女を再び見出したときには、挨拶をして面白がったりしたものだった。

ドノワゼルがもつ成功者然とした外観は、彼が社交界に受け入れられるのを容易にした。かなりの速さで高い水準の評価を得るようになったが、それは場を陽気にし、機知を撒き散らし、どんな仕事でもこなした結果、やがて皆が彼を必要とするようになったからであった。彼の人間関係は外国人、芸術家、演劇人にまで及び、また彼は娼婦たちに関しても詳細な知識を有していたので、実に様々な場面で貴重な人材となった。劇場の桟敷、監獄や画廊の見学の許可、重罪院のある淑女の為の傍聴席、もしくはある紳士の為の外国の勲章、そういったものが必要になったら？　人々は彼のもとへ行くのである。証人として立ち会った決闘に、彼は揺るぎない決然さを以て臨み、保証するべき名誉並びに生命に関して男らしい配慮を示した。彼は感謝されたうえに尊敬を享受し、決闘に関する彼の抜きん出た評判が衰えることはなかった。彼の性格は評価を高め、富者たちからさえ一目置かれるようになったが、彼らの金銭は必ずしも彼に敬意を表されていたわけではなかった。

（つづく）

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p 168–185.